

相模原殺傷事件1年 被害者家族はいま

日本はまだまだ差別社会だと感じた…けど、

神奈川県相模原市の障害者施設「津久井やまゆり園」で46人が殺傷された事件から26日で1年です。事件で重傷を負った被害者とその家族はいま。 本田祐典記者

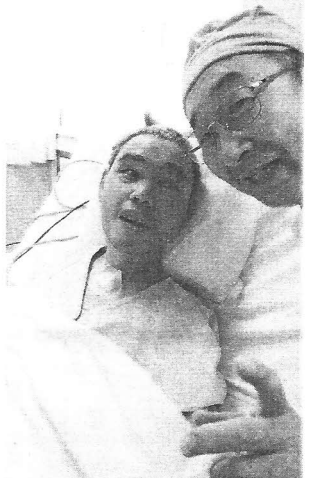
知的障害と自閉症がある尾野一矢さん(44)。事件の生存者の一人です。

7月、しほひいながら、てんかんの発作を起してしまった。その翌週には、顔をかきむしる自傷行為で顔面が血だらけだった。事件前は落ち着いていて数年前のようだった。



「障害があっても幸せに暮らせることを証明したい」と語る尾野剛志さん、チキ子さん。リビングには家族の写真がたくさん飾られている。7月中旬、神奈川県座間市

(75)は、「いまも一矢の心で、事件のことが残っているのではないかと話します。一矢さんは事件で腹や首など数カ所を刺されて意識不明の重体でした。回差たったもう一人の入所者はなくなりました。



事件の4日後、父親の姿を見て笑顔をおせる一矢さん。何度も「おとうさん」と呼んだ(2016年7月30日(尾野剛志さん提供))

障害があっても 幸せに生きていける それを証明したい

父親(剛志)は(一矢)とチキさんは早朝、知人からの電話で起こされました。駆けつけた病院で、一矢さんは手術を受けていました。チキさんは、息子を失いかねなかつた当時のことを思うと、いまも涙が出

ます。「医師からは命の保証はできないといわれ、もう帰ってこないのかと思いましたが、一命をとらぬ、翌日意識が戻った一矢さん。その後も大変だったと剛志さんは振り返ります。転院先でパニックになった一矢

さんは食事を拒否し、夜も眠らず、体も触らせません。落ち着いて退院したところ、体重は6キロ減っていました。事件の影響は一矢さんの体にも残りま

す。剛志さんには、事件に心を痛めた多くの障害者とその家族に伝えたことがある。私たちが生きていけるのが、障害があっても安心して生きていける証明になる」といっています。

姿見せることで伝えるのは

「犯行はもう終了同僚元職員は植松聖被告(27)は、障害者の存在そのものを否定する主張をしていました。剛志さんは、被告のような極端な偏見だけでなく、社会のなかで障害者への差別が広がることを感じています。その一つが警察の対応です。神奈川県警は事件の犠牲者をすべて匿名とし、性別と年齢以外を公表しませんでした。知的障害者の支障施設であり、保護族のプライバシー保護が必要が極めて高い」と昨年8月発表のコメント(2)というのが理由です。剛志さんは、「事件は、日本がまだ差別社会だと感じていたことを突き付けている」といっています。最近、剛志さんが悪戯一矢さん、さらにも両親がたいてい幸せな

●相模原殺傷事件

2016年7月26日未明、神奈川県相模原市の障害者施設「津久井やまゆり園」に、元職員が侵入。刃物で入所者19人を刺殺し、職員を含む27人に重軽傷を負わせた事件。殺人事件の死者数としては戦後最悪とされます。

殺人罪などで逮捕・起訴されたのは植松聖被告(27)。事件前の16年2月には、衆議院議長公邸に「障害者が安楽死できる世界を望む」などとする手紙を持参。襲撃を予告していました。植松被告は逮捕後、「障害者はいなくなればいい」となど供述し、障害者の存在そのものを否定する主張が社会に衝撃を与えました。

植松被告は逮捕後、「障害者はいなくなればいい」となど供述し、障害者の存在そのものを否定する主張が社会に衝撃を与えました。